I. 置物の時代—明治

The Era of the "Okimono"

明治10年代から20年代にかけての日本の美術界では、人物や鳥、動物をかたどった立体像は「置物」と呼ばれることが一般的であった。陶磁や金工、漆工といった工芸の技法により制作されたものであろうと、木や象牙、石を彫り刻むという彫刻の手法でかたちづくられたものであろうと、立体の造型品は、すべてが置物だったのである。その特徴は、まず第一に、作者の高度な技巧が存分に発揮されていることと、それを受けて、多くは、細部にいたるまで写実的な表現が追求されているという点にある。だが、それ以上に重要なのは、ほとんどの作品が、制作当時は専用の置物台をともなっていたということであろう。置物は、台の上に飾り置かれて鑑賞されるからこそ、置物だったわけである。

その後、明治20年代後半以降には、日本でも木を彫り刻んだり、ブロンズで鋳造する立体像を「彫刻」ととらえる西欧美術の概念が紹介されるようになる。だがそれでも、ほぼ明治期を通じては、「置物」と「彫刻」の違いを明確に区別して考えるひとは少なかったのである。

1—作者不詳《伊部焼仙人吹貝置物》
江戸後期～明治初期　陶磁

・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。

・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

近代日本の置物と彫刻と人形と
— 豊饒なる立体像の世界
三の丸尚蔵館展覧会図録No.34

編集　宮内庁三の丸尚蔵館
制作　株式会社 東京美術
翻訳　横溝廣子
発行　宮内庁
平成16年3月27日

Modern Japanese Ornamental Artifacts, Sculpture, and Dolls
— the fruitful world of three dimensional figures
Sannomaru Shōzōkan Exhibition Catalogue No.34

Edited by the Museum of the Imperial Collections, Tokyo
(Sannomaru Shōzōkan)
Printed by Tokyo Bijutsu Co., Ltd.
Translated by Hiroko Yokomizo
Published by Imperial Household Agency, Japan
Issued on March 27, 2004

Copyright ©2004, The Museum of the Imperial Collections, Tokyo